公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948年創設され、現在約85の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I.

I.T.I.NEWS 2017.8.31. No.128

転機迎えたＩＴＩの運営体制

スペイン・セゴビアで第35回世界大会

報告 常務理事・事務局長 曽田修司

新たに理事に選ばれた各センターの代表者たち＝左からスロベニア、ロシア、フジャイラ、（一人おいて）スイス、中国、米国、ベトナム、スペイン、イタリア、インド、スーダンの各センターの代表

第35回となるＩＴＩの世界大会が、２０１７年７月17日から22日にかけて、スペイン・マドリッドの近郊にある世界遺産の街セゴビア市で開催された。これは、当初、16年６月にブラジルのマナウス市で開催される予定で準備が進められていた大会が、ブラジルの政情不安の影響を受けて開催の直前になって中止されたのを受けて、ＩＴＩのスペインセンターから新たに開催の申し出があり、一年の準備を経て開催にこぎつけたものである。

本部事務局上海移転後初の世界大会

セゴビア大会は、ＩＴＩ本部事務局がパリから上海に移転（２０１６年）した後の初めての世界大会であった。ＩＴＩの運営体制が転機を迎えた後の開催となったため、大会運営並びにＩＴＩ全体の運営についてどのような方向性が示されるのかが注目される大会だったと言えよう。

この世界大会においては、毎回、トビアス・ビアンコーネ事務総長による事務局長レポートが配布される。これまでは、冊子体の印刷物を作成して大会参加者に受付で他の資料キットとともに配布されていたものだが、これが、今回の大会からは電子ファイルが収録されたメモリーカードによる配布に置き換わった。２５６ページからなるこの事務総長レポートは、ＩＴＩ本部のウェブサイトにも掲載されており、自由にダウンロードできる。

さて、今回の世界大会レポートでは、前回大会のときの報告に引き続き、日本センターにとっては残念な報告をしなければな

らない。それは、ＩＴＩの理事国委員会(Executive Committee、ＥＣ）の選挙に関してである。

日本センター、理事国委員会選挙落選

世界大会初日（17日）の全体会議の場で理事国選挙が行われた。この選挙は立候補制で、立候補の資格は個人ではなく各国センターに与えられている。

選挙の方式は、投票を2回に分けた2段階投票制で行われた。第1ラウンドでは、新たに理事国選挙に立候補した国、および理事になって1期目で今回初めての改選を迎えるセンターが選出の対象となる。今回立候補したセンターは、アルジェリア、ベルギー（フラマン語圏）、キューバ、グルジア、イラン、インド、イタリア、日本、韓国、コソボ、マケドニア、スペイン、ヴェトナムの13のセンターであった。開票の結果、インド、イタリア、スペイン、ヴェトナムの4センターが当選となった。

ＩＴＩ総会（全体会議）の様子

第2ラウンドは、2期以上理事国センターの任にあるセンターの中から選ばれる。立候補したセンターは十一センターであったが、そのうち、ブルキナファソ、中国、ドイツ、フジャイラ（ＵＡＥ）、ロシア、スロベニア、スーダン、スイス、ＵＳＡの9センターが当選し、キプロス、フィリピンは落選した。

投票総数（出席及び委任投票したセンター数）は、57だったことが発表された（委任は5票）。当選の要件は、投票総数の過半数（29票）を得ていること、当選者の数が20を超えないこと、の二つである。

理事国数、13ヵ国に激減

この結果、ＥＣメンバーに選ばれた各国センターは、前回大会では16だったが、今回はさらに減少して13となった。

この結果をどう読み取ればよいのだろうか。２０１１年に中国廈門で開かれた第33回世界大会以前は、定数枠いっぱいの20センターが選ばれていたのだが、前回のエレバン大会と今回のセゴビア大会では選出される理事国の数が激減したことが新しい動向として注目される。

以前は本部事務局があったパリに事務局スタッフが常駐していたので、活動が行われる範囲は、どうしてもヨーロッパ・アフリカが中心だった。その他の地域の各国センターは、2年か3年に一度の世界大会に出かけていくが、その間の活動に強い関わりを持ちにくい。そのような中で、この20数年にわたって、バングラデシュ、韓国、日本の各センターが歴代の会長、理事を輩出していたことは特筆されてよいが、最近になって理事選出をめぐる状況が変わってきたと言えるのかもしれない。今回の選挙でも、残念ながら日本センター（曽田）は当選に至らなかった。韓国センターからは、前回立候補した韓国演劇協会会長のチェ・チリム氏に代わって副会長のキム・ジョンファ氏が立候補したが、こちらも落選した（バングラデシュは今回立候補を見送った）。

また、近年、ＩＴＩ本部に対する財政的な大口スポンサーとして、フジャイラ（Ｕ

ＡＥ）、中国センターの存在感が非常に大きくなっているので、そのことが理事会構成メンバーの変化に影響していると考えることもできるかもしれない。

この間、エレバン大会で新会長（フジャイラのムハマド・サイフ・アルアフカム氏）が選出されて新理事会メンバーが就任したが、その際に就任した副会長４名のうち、２名が今回のセゴビア大会で退任した。近年では、毎年フジャイラでの理事会開催が恒例化している。

「国際伝統劇フォーラム」銀川で開催

中国センターは、アジア・太平洋地域の各国センターに呼びかけてＩＴＩ「アジア伝統劇フォーラム」を２０１６年３月に中国・広州市で開催し、同年ＩＴＩ第１４４回執行委員会で「国際伝統劇フォーラム」への改組が承認された。その第１回の大会が今年の６月に銀川市で開かれ、日本センターから永井多恵子会長と菱沼彬晃理事が参加した。

今回、ＩＴＩ本部事務所の移転に伴い、事務局スタッフも事務局長以外は全員入れ替わった中で世界大会の仕切り直し開催を余儀なくされたこともあり、現在の理事国メンバーには名誉職的な役割というよりも実質的な貢献が求められるようになっていると推察され、理事国選挙のあり方も、これまでよりも現任メンバーの組織運営への貢献に対する信任投票に近い性格に変わってきているのではないだろうか。

活発化するアジア太平洋地域評議会

さて、本報告の最後に、ＩＴＩのアジア太平洋地域の地域的な集まりである「アジア太平洋地域評議会」の活動について、少し紹介しておきたい。

ＩＴＩの事業の進め方は、本部事務局主導で進めるものと、各国センターのイニシアティブで行うものの二つのタイプがある。前者としては、「ワールドシアター・デイ」と「インターナショナル・ダンスデイ」の事業がある。後者は、「紛争地域の演劇」、「人権・固有文化・移民問題ネットワーク」、「社会変革のための演劇」、「演劇高等教育ネットワーク」、「若手舞台制作者委員会」など、テーマ別の活動を行なっている委員会組織（ＩＴＩでは、これは「委員会＝コミティー」と称している）や、地理的なまとまりにより、各国センターが集まってネットワークを作っている地域評議会などによる活動があり、こちらのタイプの活動は、そのイニシアティブが各国センターに委ねられている。

大会期間中、日本を含むアジア太平洋地域のメンバーが集うアジア太平洋地域評議会のミーティングは、7月20日の朝に行われた。出席は、日本、韓国、中国、フィリピン、ヴェトナム、インドネシア、インド、バングラデシュ、スリランカ、モンゴル、イラン、香港、グルジアの13カ国・地域である（中国代表はこのミーティングでは不在）。

明年1月、イランで演劇祭開催

この集まりは、これまでの世界大会ではさほど活発な活動がなされていたわけではないが、今回は、フィリピンセンター他から具体的な共同プロジェクトの提案があった。①英語に翻訳された各国の優れた戯曲を集めて出版すること②フィリピンのラジオの国際放送チャンネルでドラマリーディングの番組をシリーズで制作・放送すること③２０１８年1月に開催されるイランの演劇祭で情報共有・戦略構築のためのミーティングを行おうという提案である。

今回、日本センターからの参加者は厳しい財政事情のために1名にとどまった。日本からは曽田の他に演出家の角本敦氏が個人の立場で参加し、世界各地の演劇人とのネットワークを積極的に構築していた。

ＩＴＩ英連邦部会　力強い２年の歩み

ＩＴＩ英連邦部会は、ＩＴＩの活性化と会員相互の交流を図るために、イギリス、カナダ、オーストラリアなど英連邦諸国の演劇に関係するＩＴＩ会員で結成された任意の部会です。月１回の例会、３～４ヵ月に１回の「戯曲研究＆懇親会」などを重ね、この７月21日でまる２年が経ちました。

戯曲研究では『アイスランド』（ニコラス・ビヨン作、吉原豊司訳）『その後の二人～ソーニャとアンドレイ』（ブライアン・フリール作、吉岩正晴訳）『とこしえにあなたのもの…マリー・ルー』（ミッシェル・トレンブレイ作、吉原豊司訳）アプライドドラマ『帰還』（プレ・テキスト構成アレン・オーエンズ、オーハシ・ヨースケ訳）を取り上げた他、今年４月にはカナダでの研究留学を終えて帰国した曽田修司事務局長を迎えて「カナダとケベック州のパフォーミング・アーツ事情」についてのお話を聞く会を開催し、同時に、『リタ・ジョーのよろこび』（ジョージ・リガ作、吉原豊司訳）を題材に、三輪えり花によるワークショップを実施しました。

１年近いカナダ在外研究から帰国し、報告会を行う曽田修司ＩＴＩ常務理事・事務局長（４月29日、東京・新宿のフリースペース無何有で）

研究作『アイスランド』をブローダーハウスで上演

『アイスランド』は、リーディングを聴いた吉岡孝子プロデューサーの目にとまって小劇場ブローダーハウスで６月30日から３日間、４回の上演が実現し、来日中の作者ニコラス・ビヨン氏も観劇に見えました（ルネ・ド・オバルディア作「亡夫」と併演）。

これからの活動として海外との交流、舞台芸術専門の翻訳家・通訳育成プログラム、留学希望者セミナー等々の企画実現を目指しています。

（報告　副会長・吉岩正晴）

アートマネージメントとマーケティングを考える

オールに11ヵ月間滞在し、当地のアートマネジメントに関する事情を視察する機会を得た。日本への帰国後、ＩＴＩ英連邦部会の第５回会合（フリースペース無何有）でモントリオール滞在中の見聞をご報告させていただく機会を得たので、その概要を報告する。

カナダとケベック州のパフォーミング・アーツ事情

私は２０１６年の４月から17年の２月にかけて跡見学園女子大学のサバティカル（在外研究留学）制度を利用してカナダ・モントリ

カナダ・モントリオールの大規模文化イベントと言えば、モントリオール・ジャズ・フェスティバルを思い浮かべる方も多いだろう。実際、モントリオールはフェスティバル・シティとも呼ばれ、一年を通して各種の文化フェスティバルが多数開催されている。モントリオールの街の中心部のプラス・デザール（芸術広場）と呼ばれる街区

には、コンサートホールや劇場、美術館等の巨大な文化施設群が立ち並び、その周辺の街路には野外のフリースペースが集積されていて、夏の間はそこにいくつもの大きなイベントステージを組んで無料の野外イベントが数多く開催される。

カナダフランス語圏最大の都市

モントリオールには、モントリオール交響楽団をはじめ、オペラ、バレエ、演劇、ダンスと世界的にも一流と目される団体が数多く揃っているが、なかでも、北米の他の都市に比べて際立っているのは、シルク・デュ・ソレイユを始めとするサーカス・カンパニーが質・量ともに大きな存在感を持っていることである。また、１９８０年代以降、モントリオールがコンテンポラリーダンスの分野で世界的な注目を集めてきたという歴史的経緯も見逃せない。

モントリオール市は人口約２５０万人、ケベック州（人口約８百万人）内で最大の都市であり、カナダ・フランス語圏の最大の都市でもある。言語政策では、カナダ連邦政府が英語とフランス語の二つを公用語としているのに対し、ケベック州は、１９７７年にフランス語憲章を定め、フランス語のみを公用語としている。カナダは、10の州と四つの準州からなる連邦国家であるが、その中でフランス語を母語とする人々が圧倒的多数を占めるのはケベック州のみである。カナダ全体ではカナダ・カウンシルの存在に見られるように、イギリス式の文化政策との共通性が見られるが、ケベック州では文化政策において政府による文化投資の比重が高く、全体としてはフランス式とイギリス式の折衷といえようか。

隣国の米国を最大の市場として

しかし、現地で観察していると、カナダやケベック州の文化政策の駆動要因を形作っているもう一つの大きな存在に直ちに気がつくことになる。それは、隣国アメリカ合衆国におけるパフォーミング・アーツの市場の集積である。

モントリオールは、ニューヨークのほぼ真北に位置しており（飛行機で1時間足らずの距離）、パフォーミング・アーツの関係者はことあるごとにニューヨークとの間を往き来している。私も、今回の滞在中に何度かニューヨークに足を運んだ。毎年1月にニューヨークで開催される世界最大の舞台芸術見本市ＡＰＡＰ（エイパップと発音）では、パフォーミング・アーツ業界のプロデューサーとプレゼンター（劇場やアートセンター、フェスティバルなどの上演機関）たちが米国内のみならず世界中から集まる。ＡＰＡＰを構成しているパフォーミング・アーツの関連団体は約１６００、1月のニューヨーク会議には約５千人のパフォーミング・アーツ関係の専門家が集まる一大イベントであり、それに照準を合わせて専門家に向けた多種多様なショーケースが開催される。この時期のニューヨークは、一般客向けの公演とともにパフォーミング・アーツの専門家（プレゼンター）向けの公演が多数上演され、全米各地の舞台関係者がそれぞれの劇場やアーツセンターでの上演演目を決定していくためのビジネスミーティングの場として重要な機能を果たしている。また、ＡＰＡＰは米国国内だけではなく国際的なビジネスの場でもある。いまは中国の国家文化機関が売り込みに熱心で、役人に率いられた伝統芸能の劇団がＡＰＡＰの会場内で積極的にアピールをしているのが注目された。

モントリオール舞台芸術の見本市

ＡＰＡＰがその規模において世界最大のパフォーミング・アーツの見本市であるのに対して、モントリオールには二年に一度秋に開催されているＣＩＮＡＲＳというパフォーミング・アーツの見本市がある。ＣＩＮＡＲＳの特色は、地元ケベック州のアーティストを世界中に売り込むための催しというコンセプトが明確であることである。ＡＰＡＰがどちらかというと買い手中心の催しとして設計されているのに対し、ＣＩＮＡＲＳは売り手中心のそれとして設計されているのが特徴だ。

ＡＰＡＰやＣＩＮＡＲＳでは、直接的な

ビジネス拡大の機会であるとともに舞台芸術関係者の情報共有やネットワーク形成の機会でもあり、世界中のパフォーミング・アーツの成功事例が紹介されるセミナーが会議に併設されている。そこでのレクチャーやディスカッションは、それぞれのウェブサイトにアップされているので、誰でもそこにアクセスすれば、アーツマネジメントの最新の注目トピックについての情報を得ることができる。

さて、以下、カナダ・米国と日本のアートマネジメントをめぐる状況を比較してみたい。

国家の文化予算、5年間で倍増

カナダでは、2015年10月にトルドー自由党政権が誕生し、16年3月には文化予算の大幅増が発表された。その中身は、国営放送局の予算拡大や博物館や劇場などの文化施設の拡充が主であるが、連邦レベルの文化助成機関であるカナダ・カウンシルの予算も5年間で倍増することになった。このように、現在の世界的な政治動向の中においては例外的なことに、文化を重視しようとする動きがカナダで起きていることに注目したい。

パフォーミング・アーツの業界のあり方を考えると、本来、観客を呼ぶのは劇場の役割であり、クリエイターがその役割を担うわけではない。しかし、日本ではこれまで劇場が観客をつくり増やすのに積極的な役割を果たしてきたとは言えないのが実情である。

私がゲストリサーチャーとして滞在したHEC（フランス語でアッシュ・ウー・セーと発音する。モントリオール大学のグループ校である経営大学院）は非常に国際色豊かなビジネススクールで、大学全体では大学院生・学部生合わせて1万8千人、世界140カ国から学生が集まっている。

マーケティングへの取り組み

当地で改めて感じたのは、米国でもカナダでも、マーケティングがアートマネジメントの基本となっているのに対して、日本のアートマネジメントでは、それとは対照的に、マーケティングを中心に据えた議論がほとんどなされてこなかったという事実である。たとえば、HECのF・コルベール教授の手になるマーケティングの教科書『文化とアートのマーケティング』（2012年に第四版発行、初版は1993年）はこれまでに13言語に訳されているが、いまだに日本語訳は出ていない。

コルベール教授によると、マーケティングの対象となる市場には四つの種類がある。①消費者市場、②パートナー市場、③政府（国）、④民間（寄付、メセナ）の四つである。このうち、パートナー市場とは端的にいうと劇場のネットワークのことをいう。そもそも、パフォーミング・アーツの業界のあり方を考えると、本来、観客を呼ぶのは劇場の役割であり、クリエイターがその役割を担うわけではない。これは、書店がなければ出版は産業にならないし、映画館がなければ映画は産業にはならないのと同じ構造である。しかし、残念なことに、日本ではこれまで大都市以外では劇場が観客をつくり増やすのに積極的な役割を果たしてきたとは言えない。そのため、演劇が大きな産業に育って来なかったし、社会的にもそのように認識されていない。したがって、今後は、ディストリビューター（流通を担う団体。ここでは劇場等のこと）の存在に注目し、その産業化を促すような育成策が日本には必要だと思われる。

私が今回の在外研究中に学んだ重要なことは、各国の文化政策というものは、それぞれの歴史的文化的事情によって規定されるところが大きく、国や地域によってさまざまな形をとりうるということである。そのことは、他国の文化政策の中身をそのまま移入すればよいわけではないことを示しているが、日本におけるパートナー市場の育成拡大による文化振興の可能性及び「文化とアートのマーケティング」のあり方について、引き続き研究を続けていきたいと考えている。

（報告　常務理事・事務局長　曽田修司）

サスペンス仕立ての社会派ドラマ

『屠殺人ブッチャー』読売演劇賞にノミネート

報告
吉原 豊司

いまカナダでメキメキと頭角を現している劇作家にニコラス・ビヨンという名の若者がいます。そのニコラス・ビヨンが6月下旬から7月初めにかけて来日しました。東京で翻訳上演された2本の自作を観るためでした。『屠殺人ブッチャー』（吉原豊司訳、小笠原響演出、名取事務所制作、於：下北沢「劇」小劇場）と『アイスランド』（吉原豊司訳、新見真琴演出、ＹＵＫＩプロデュース制作、於：東松原ブローダーハウス）がその二本です。『アイスランド』はＩＴＩ日本センターの英連邦部会でも戯曲研究が行われ、せんがわ劇場でもリーディング上演されています。

ニコラスさんの書く戯曲には共通する特徴があります。社会性・政治性の強いテーマをサスペンスドラマ風に仕立てて客席に届けるというのがそれ。観客は物語の展開をハラハラ、ドキドキ楽しみながら、最後にズシンと重いメッセージを突きつけられるのです。客を飽きさせず、それでいて伝えるべきメッセージはしっかりと伝える作劇術は見事としか言いようがありません。

カナダ気鋭の劇作家 ニコラス・ビヨン氏来日

そんな見事な作劇術ゆえに、東京で上演された二本はいずれも好評。就中（なかんずく）、東欧とおぼしき国で起きた民族紛争をテーマにした『屠殺人ブッチャー』には「現実をえぐる巧妙な寓話」（毎日新聞）とか「戦争の無残さをいやがうえにも際立たせる」（今村修氏ブログ）とか「驚愕の展開。心理サスペンス劇としても超一級」（ブログ梁塵日記）と言った劇評が寄せられ、読売演劇賞（２０１７年上半期分）にも次の４部門でノミネートされています。作品賞、男優賞（佐川和正）、女優賞（森尾舞）、演出家賞（小笠原響）。

『アイスランド』公演後にニコラス・ビヨン氏を囲んで（左から２番目が吉原豊司氏、４番目がビヨン氏）　写真提供・新見真琴氏

ニコラスさんの代表作には、上述二本の他、もう一本『エレファント・ソング』があります。母親が世界的に有名なオペラ歌手で滅多に家にいないため愛に飢えている少年。その捻じれた心象風景を見事に描出したこの作品も今年３月、名取事務所が上演（吉原豊司訳、扇田拓也演出、於：劇小劇場）、好評でした。また本作は、カナダ映画界の寵児グザビエ・ドランの主演で映画化もされており、ご覧になった方も少なくないかと思います。

そんな素晴らしい作品を多数書いているニコラスさんはまだ39歳。日本での過密とも思える全日程（10日間）を精力的にこなし、7月8日トロントに帰って行きました。見送りに行った私に残した言葉が「今回の訪日体験を下敷きに、日本を舞台にした新しい戯曲を書いてみたくなった」というもの。どんな新作が生まれてくるのか、楽しみです。

（カナダ演劇翻訳家）

永井多恵子会長がレクチャー「伝統劇と現代劇の融合（フュージョン）」

左からトビアス・ビアンコーネＩＴＩ事務総長、ラメンデュ・マジュムダＩＴＩ名誉会長、永井多恵子日本センター会長、季国平ＩＴＩ副会長・ＩＴＩ中国センター（中国戯劇家協会）会長

中国寧夏回族自治区首府・銀川で第１回「国際伝統劇フォーラム」

９百年前シルクロードに栄え、井上靖の『敦煌』の舞台ともなった「西夏王国」の故地、中国寧夏回族自治区の首府・銀川で第１回ＩＴＩ「国際伝統劇フォーラム」が６月18日から22日まで開かれました。これに合わせてＩＴＩアジア太平洋地区ミーティング、第15回「中国芸術祭」が併催され、世界から20を超える国と地域、日本センターから永井多恵子日本センター会長、菱沼彬晁理事が参加しました。「国際伝統劇フォーラム」の設立は２０１６年３月、広州で開かれた「アジア伝統劇フォーラム」で提案され、同年12月にスペインで開催されたＩＴＩ第１４４回執行委員会で承認されて第一回の開催となりました。

パフォーミング・アーツの〝ルーツ〟を守ろう

ＩＴＩ副会長でＩＴＩ中国センター（中国戯劇家協会）会長の季国平（きこくへい）氏は、伝統劇の保護と継承に取り組むワーキング・グループがＩＴＩ60有余年の歴史の中で初めて発足した意義を訴え、各国センターの協調と交流の推進を呼びかけました。

トビアス・ビアンコーネＩＴＩ事務総長は、冒頭のあいさつで「パフォーミング・アーツの〝ルーツ〟が歴史の舞台からフェイド・アウトしようとしています。各地の伝統芸はコマーシャリズム、グローバリズムの波に押しやられ、今や衰亡の瀬戸際にあります」と危機感を語りました。

「伝統劇と現代劇の融合（フュージョン）」と題するレクチャーを行った永井多恵子会長は各国センターの中

「国際伝統劇フォーラム」筆頭理事＝会長に中国センター会長・季国平氏を選出、永井会長は理事就任

で異彩を放ちました。

「日本の舞台芸術の特徴は今も古典芸能と現代の舞台芸術が共存し、それぞれに根強い支持層を持っていることです。古典演劇である歌舞伎は今も現代の舞台芸術と並んで、エンターテイメント市場の一角で安定した興行成績を続けています。これは世界でも希有なケースと言えるのではないでしょうか？」

永井会長は能楽に話題を移し、ジャン・ルイ・バローやロシアのレフ・ドージン（ロシア国立サンクトペテルブルグのマールイ・ドラマ劇場芸術監督）らが能楽に大きな関心を寄せていたことを紹介し、西欧のレアリスムを超えるものとして能楽や文楽が持つ「抽象表現」や「象徴性」に新しい境地を見出して会場に新鮮な印象を与えました。締めくくりに世田谷パブリックシアター芸術監督の野村萬斎が『三番叟』のステップでラヴェルの『ボレロ』を舞う映像を紹介し、聴衆の興味をかき立てました。

「パフォーミング・アーツの〝ルーツ〟が歴史の舞台からフェイド・アウトしようとしています。世界各地の伝統芸はコマーシャリズム、グローバリズムの波に押しやられ、今や衰亡の瀬戸際にあります」――トビアス・ビアンコーネーTT事務総長

ITI中国センター主席で著名な演劇評論家でもある季国平氏は、京劇が外国人に分かり易く「北京オペラ」と訳されていることに強く異議を唱えました。

「京劇や中国の戯曲（伝統劇）はオペラではありません。日本の歌舞伎がKABUKIであるように戯曲はXIQU（シーチュイ）、京劇はJING（ジン）JU（ジュイ）と呼んでほしい」と訴えました。

季国平著『中国の伝統劇』評論集を菱沼彬晁理事が今秋翻訳出版

これを受けて菱沼理事は、演劇評論家・季国平氏の著書を日本語訳し、『中国の伝統劇入門／季国平評論集』として今秋発行の準備が進んでいることを報告し、各国の伝統劇が各国に翻訳出版され、相互の理解が深まることへの期待を表明しました。

「国際伝統劇フォーラム」の成立大会では筆頭理事＝会長に中国センター会長の季国平氏が選出され、センター間ネットワーク構築について話し合われました。定数20人を上限とする理事会は各センターの代表から選出され、日本センターの永井会長は各国からの強い慫慂（しょうよう）によって理事に列することになりました。

「国際伝統劇フォーラム」今後の活動目標については次の各項が了解されました。

①伝統劇の演技、上演形態を継承し、その持続的発展に努める。

②地域社会、特に若い世代への啓蒙活動を行い、伝統劇に対する親しみ、尊重の念を涵養する。

③地方自治体や国家に対して保護政策、助成措置を訴える。

④各センター間で伝統劇に関する交流を活発化し、演劇祭、学術討論、展示会などの開催に努める。

「国際伝統劇フォーラム」に合わせて開催された第15回「中国芸術祭」では、地元寧夏の秦腔（しんくう）劇団が『王貴と李香香』（作・錦雲＝元北京人民芸術劇院院長）を上演し、好評を博しました。秦腔特有の高い調子の節回し、急迫のリズムは悽愴感に満ち、〝秦腔四大名旦（しだいめいたん）〟に数えられる主演女優・柳萍の演技と相まって、旧社会の圧政に苦しんだ〝西域の民〟の思いをあますところなく伝えるものでした。（報告　理事・菱沼彬晁）

『ハンナとハンナ』

リーディング上演とディスカッション

演劇による難民へのアプローチ

イギリスのハンナ役の木村飛鳥（右）とコソボからの避難民のハンナ役の吉岡花絵　撮影・石澤知絵子

7月11日（火）、東京・六本木の政策研究大学院大学内想海楼（そうかいろう）ホールでジョン・レタラック作『ハンナとハンナ』のリーディング上演と難民に関するディスカッションを行い、200人近くの方にご来場いただきました（主催＝国際演劇協会日本センター／共催＝政策研究大学院大学／JKA（競輪）の補助事業「国際交流の推進活動」）。「一度きりの上演ではもったいない」「若い来場者が多くてよかった」という声も多く寄せられました。また、このイベントの模様はNHKの「首都圏ネットワーク」内で紹介されました。

作＝ジョン・レタラック（John Retallack）
翻訳＝中山夏織
訳詞＝田中萌観
演出＝鈴木アット（劇団印象（いんぞう）-indian elephant-）
総合司会＝垣内恵美子（政策研究大学院大学 文化政策コース／ディレクター、教授）
出演＝木村飛鳥、吉岡花絵
アンダースタディ＝龍澤幸奈
英語字幕製作＝油上恵子
■ディスカッション
スピーカー＝田中志穂（認定NPO法人難民支援協会広報部コーディネーター）、鈴木アット（『ハンナとハンナ』演出）
司会＝中山夏織（『ハンナとハンナ』翻訳）
・照明デザイン＝篠木一吉
・照明オペレーション＝伊藤翔大
・音響＝斎藤裕喜
・舞台監督＝渡邉武彦
・PRデザイン・撮影＝奥秋圭
・記録（写真）＝石澤知絵子
・記録（映像）＝吉本直紀
・記録（ライター）＝中島香菜
・制作協力＝NPO法人シアタープランニングネットワーク
・制作補佐＝浅賀さくら

コソボからイギリスに逃れた少女

『ハンナとハンナ』は、イギリスの劇作家ジョン・レタラックによる2001年初演の作品。舞台は1999年のイギリス南東部の港町・マーゲート。地元に住む16歳の少女ハンナと、ユーゴ紛争のただなか、コソボから母・兄とともにマーゲートに避難してきたハンナが、先入観と対立感情を持って出会ってから、互いを理解し、打ち解けるまでを描く2人芝居です。レタラックがマーゲートの10代の若者たちとのワークショップを行って書いた作品で、若者の生の声がたくさん詰まっています。

日本センターで本作を上演するのは実は2度目です。2009年の夏、センターは本作のリーディングを沖縄のキジムナーフェスタで行いました。演出は保科耕一さん、出演は三倉茉奈さん、三倉佳奈さんでした。あれから8年、ブレクジット（イギリスのEU離脱）を経た今、本作はあらたな現代性を帯びて、聞く者、読む者を惹きつけます。

オーディションで二人のハンナ役

本作の翻訳者であり、当企画のプロデュースをお願いした中山夏織さんと、演出の鈴木アットさんのもと、オーディションによって2人の出演者と1人のアンダースタディを選びました。一週間で50名を超える応募があり、3人を選ぶのは決して容易ではありませんでしたが、幸いにも、イギリスのハンナ役の木村飛鳥さん（20）、コソボからの避難民のハンナ役の吉岡花絵さん（16）、そしてアンダースタディの龍澤（たつざわ）幸奈さん（24）の3人に出会い、すばら

しい座組が誕生しました。本作にはたくさんの洋楽ポップスが登場します。若手、田中萌観（ともみ）さんの手がけた訳詞も観客を作品世界に引き込む力を持っていました。

英語字幕の利用

国際的な対話を生もうと、公演には英語字幕を付けました。6つの大使館（イラク、ブルキナファソ、カンボジア、マリ、コンゴ、ジンバブエ）の大使および大使館員のほか、政策研究大学院大学の学生さんや一般の方など、日本語を母語としない方々にもお越しいただきました。

演劇の力、難民問題に活かして

上演後には1時間半のトークを行いました。司会は再演にあたりマーゲートを視察した中山夏織さん。鈴木アツトさんと難民支援協会（JAR）広報部コーディネーターの田中志穂さんを迎えて、作品のことや日本にいる難民のこと、難民問題に対して演劇のできることなどを話しました。客席からもたくさん質問や意見が出ました。トークの内容は、9月に日本センターホームページに掲載予定です。どうぞお楽しみに。

（報告　事務局・後藤絢子）

◇ITI日本センター主催のイベント

デーア・ローアー「言いようのないこと」を伝える

デーア・ローアーはデビュー作『オルガの部屋』以降、次々と話題作を発表して脚光を浴びているドイツの女性劇作家です。日本では2009年の『タトゥー』（制作＝新国立劇場、演出＝岡田利規）以来、数多く上演されています。ITIでは11年「世界の秀作短編研究シリーズ　リーディングドイツ編」を開催、デーア・ローアー氏の『言葉のない世界』を紹介しました（訳＝阿部剛史、演出＝小山ゆうな、ドラマトゥルク＝三輪玲子、出演＝山下順子）。

今夏、東京演劇アンサンブルによる『泥棒たち』公演を機に2度目の来日を果たすローアーさんに、「言いようのないことを伝えるための」独特の文体と、作家と劇場の関係を軸に、たっぷりと語っていただきます。聞き手には演劇ジャーナリストの伊達なつめさんを迎え、特別ゲストとしてローアー作品の翻訳・ドラマトゥルクを数多く手がける三輪玲子さんを予定。

Dea Loher
©Alexander Paul Englert

☆申込先は次ページ

◉トーク「戯曲を書くこと」＊通訳付き（独日）
■話し手：デーア・ローアー（Dea Loher／劇作家）
■聞き手：伊達　なつめ（演劇ジャーナリスト）
■日時：2017年8月30日（水）19時～21時
■会場：国立能楽堂2階・大講義室（東京・千駄ケ谷）
■入場料：無料（要予約）

文化庁委託事業「平成29年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」国際演劇年鑑2018関連企画
■主催：文化庁・国際演劇協会日本センター・東京ドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）
■制作：国際演劇協会日本センター・東京ドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）

◇ＩＴＩ日本センター主催のイベント

◉特別講座「アラブ演劇の現在」

＊通訳付き（アラビア語／日本語）

今年12月に「紛争地域から生まれた演劇９」で紹介予定の『朝のライラック（ダーイシュ時代の死について）』（翻訳：渡辺真帆）の作家、ガンナーム・ガンナーム氏をアラブ首長国連邦のシャールジャから招きます。氏はアラブ演劇協会（ＡＴＩ）でも中心的な役割を果たしています。来年10度目を迎える「アラブ演劇フェスティバル（Arab Theatre Festival）」などＡＴＩの活動とアラブ演劇の今を語っていただきます。

■話し手：ガンナーム・ガンナーム（Ghannam Ghannam／劇作家・演出家・アラブ演劇協会（ＡＴＩ）出版広報部マネージャー）
■聞き手：未定
■日時：２０１７年10月６日（金）、７日（土）
■会場：東京芸術劇場アトリエイースト
■入場料：５００円（要予約）
■主催：文化庁・国際演劇協会日本センター（予定）
■共催：フェスティバル／トーキョー

◉「紛争地域から生まれた演劇」シリーズ９

ユネスコ傘下のＮＧＯ国際演劇協会では、演劇を通じて平和の構築を目指す取り組みとして、世界各地で「紛争地域の演劇」と題するプロジェクトが行われています。日本センターでは、これに呼応するかたちで、「国際演劇年鑑」の調査・研究事業の一環として２００９年から「紛争地域から生まれた演劇」シリーズを実施しています。これまで８年にわたり、日本に知られていない優れた戯曲を発見・翻訳し、レクチャーやシンポジウム、リーディングという手法で、さまざまな国や地域の21作品を紹介してきました。

今年はガンナーム・ガンナーム作『朝のライラック（ダーイシュ時代の死について）』（とアドナーン・アルアウーダ作『ハイル・ターイハ（さすらう馬）』（翻訳＝中山豊子、演出＝坂田ゆかり）の２作品を初訳・初演（リーディング上演）、トークでご紹介します。当事業のレポートと批評を「国際演劇年鑑２０１８」に掲載、翻訳戯曲は「年鑑」の姉妹編「戯曲集」として発行し、来春みなさまのお手元にお届けします。

■２０１８年12月13（水）～17日（日）（予定）
■会場：東京芸術劇場アトリエウエスト
■主催：文化庁・国際演劇協会日本センター
文化庁委託事業「平成29年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」国際演劇年鑑２０１８（２０１８年３月発行予定）特集企画
■共催：東京芸術劇場

■ご予約・お問合せ
メール：iti.lecture@gmail.com
電話：０３・３４７８・２１８９
（事務局　平日11時～17時）
ＦＡＸ：０３・３４７８・７２１８
メールやＦＡＸでご予約の方は、「デーア・ローアートーク申込み」あるいは「ガンナーム・ガンナームトーク申込み」として本文に以下４点をご明記ください。
（１）氏名（ふりがなをつけて下さい）
（２）人数
（３）日中に連絡をとれる電話番号
（４）iti.lecture@gmail.com から受信可能なメールアドレス

デーア・ローア氏によるトークの詳細は http://iti-japan.or.jp/announce/4555/

ITI日本センター平成29年度定時社員総会

平成29年度の定時社員総会では、平成28年度の計算書類（貸借対照表、正味財産増減計算書等）の承認を行うとともに、任期満了に伴う役員及び監事の改選を行い、20名の新役員と2名の新監事を選任しました。

日時　平成29年6月25日（日）10時5分～11時25分

場所　松竹株式会社　大会議室

会員現在数　２０８名（平成29年5月28日理事会開催時）

出席者　１３３名（委任状１０６名）

出席会員　27名＝青柳敦子、安孫子 正、壱岐照美、伊藤 洋、大久保康雄、大笹吉雄、大島信久、オーハシヨースケ、小田切洋子、オンパロスダンスプロジェクト（居上紗笈）、糟谷治男、川口啓史、後藤絢子、小林弘文、斎明寺以玖子、真藤美一、曽田修司、としま未来文化財団（岸正人）、永井多恵子、永江 巌、中山夏織、新見真琴、林 英樹、菱沼彬晁、堀川登志子、松田和彦、吉岩正晴（会員現在数の２０８名の過半数にあたる１０４名の出席者に達し、総会は有効に成立）

配布資料　平成29年度定時社員総会議案書（P１～P20＋平成29年度事業計画書）

補足資料　平成29年度正味財産増減予算書

開会　10時5分に開会。会長永井多恵子の挨拶の後、定款第１５条に基づき、議長に永井多恵子を選び、直ちに議事に入る。

決議事項

【第一号議案】第四期（平成28年4月1日～平成29年3月31日）計算書類の承認

【第二号議案】役員等の選任

【第三号議案】名誉会員の選任　永江　巌氏

第一号議案の審議に先立ち、議案書の「平成28年度事業報告書」に基づき、報告を行った（当該事業報告は、平成29年5月28日開催の平成20年度第1回理事会で承認済）。続いて、第一号議案の審議に移り、定款第１２条に定める社員総会の決議事項に関わる貸借対照表、正味財産増減計算書について、さらに、財産目録及び監事による監査報告書の内容について討議した結果、全員異議なく承認された。

次いで、理事及び監事の全員が本定時総会の終結と同時に任期満了により退任することとなり、改選の必要があるため、第二号議案である役員の選任についての審議を行った。まず、選挙管理委員長の川口啓史氏より議案書の開票・集計結果報告の記載に基づき、理事候補者選挙の結果が報告された。続いて、会長より議案書の役員候補者に記載の通り選挙によって選出された理事候補者10名と会長推薦による候補者の計20名の理事候補、並びに2名の監事候補が提案され、満場一致で選出が承認された。選任された役員は以下の通り。

安宅りさ子、安孫子 正、伊藤　洋、大笹吉雄、小田切洋子、糟谷治男、加納豊美、木田幸紀、斎明寺以玖子、坂手洋二、真藤美一、曽田修司、永井多恵子、中山夏織、林　英樹、菱沼彬晁、松田和彦、三輪えり花、吉岩正晴、和崎信哉（監事）小林弘文、岸　正人

その後、事務局より、平成29年度事業計画について現状報告を行った。

次に、第三号議案について、理事として当センターの活動に多大な貢献のあった永江巌氏の名誉会員選任について満場一致で賛成を得た。

その後の質疑応答では、7月にスペインのセゴビアで開催される世界大会へ日本センターから多くの人が参加できるとよいと

いう意見や、インターナショナルダンスデイについて、ＩＴＩ本部主催のセレモニーとパフォーマンスが行われたと聞いているが、来年以降については、日本からも希望者が参加できるように事前に必要な情報を得て会員に知らせてほしい、という意見が出された。

ＩＴＩ日本センター
平成29年度第１回臨時理事会

同日　総会終了後11時30分より開催

【第一号議案】　役員の選出
会長（代表理事）に永井多恵子、副会長（代表理事）に安孫子正、吉岩正晴、常務理事（業務執行理事）に曽田修司が全会一致で選任される。

【第二号議案】　顧問の選任
総会で名誉会員に選任された永江巖氏に対し、顧問に就任いただくよう会長からの推挙があり、全員異議なくこれに賛成した。

【第三号議案】　平成29年度事業委員会委員の選任
事業委員会規約第３条に基づき、事業委員会委員を選任することに全員一致で賛成した。

会員消息（2017年１月～７月）順不同・敬称略

【個人会員　入会】
森　雅美（俳優　フリー）
山下裕子（劇団　俳優座）
中村義裕（演劇批評・演出）
安藤拓孝（松竹株式会社）
高橋夏樹（松竹株式会社）
中里毅（松竹株式会社）
野間一平（松竹株式会社）
林　知一（小川綜合法律事務所）
村井華代（共立女子大学文芸学部）

【個人会員から団体会員への変更】
市村作知雄 → 特定非営利活動法人アートネットワークジャパン（理事長：米原昌子）

【個人会員　退会】
小野田　恵
西形　節子
松本　康男

【顧問　辞任】
山口　昌紀

【ご逝去】
谷村　陽介（17年３月23日）

【会員資格停止】20名
※平成28年度第２回理事会において、会費の入金が長年滞っている方には、書面にてご連絡の上、やむなく会員資格を停止することといたしました。会費の入金がなされた場合には資格を再開させていただく予定です。
飯田道朗、伊藤和美、入月絢、入野智江、江久里ばん、荻野百合子、加藤有一、金谷暢雄、木下祐子、澤村田之助、鈴木拓、高瀬精一郎、高橋幸夫、田原昭之、西村祐、早川保清、村上隆明、横堀応彦、吉田悠樹彦、和田ちさと

ITI日本センターは個人、団体会員を募集中

国際演劇協会日本センターは舞台芸術・放送芸術の国際交流に関心をお持ちの個人・団体の会員を随時募集中。『国際演劇年鑑』などセンター発行の出版物が無料で配布され、センター主催・共催のワークショップやシンポジウムに割引料金で参加できます。

▽個人会員　入会金６，０００円
　年会費１２，０００円
▽団体会員　入会金６，０００円
　年会費１８，０００円
▽賛助会員　入会金なし
　年会費１８，０００円～
　１００，０００円（一口）
入会金免除　ただ今ご入会の方は入会金免除となります。

ご寄付のお願い

当センターは、「公益社団法人」への移行にともない、寄付金控除など税法上の優遇措置の対象となる特定公益増進法人となりました。個人の場合は、特定寄付金として一定金額まで寄付金控除が認められ、法人の場合は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。事務局にお問い合わせ下さい。

編集後記

▲ＩＴＩの第35回世界大会に参加しました。演劇に携わる人々の多様性、演劇を支える しくみの多様性、演劇の役割の多様性について考えさせられました。日本の演劇舞踊や日本センターの活動をどう伝えたらよいか、相互コミュニケーションの強化が求められています。（曽田）

▲中国・寧夏で開かれた「国際伝統劇フォーラム」に参加しました。主催者・中国センター（中国戯劇家協会）の季国平主席は戯曲（シーチュイ＝中国伝統劇）の世界進出を目指しています。ところが、日本で「戯曲」というと主に演劇の上演台本、あるいはこの形式で書かれた文学作品を指しています。季国平氏の演劇評論集の日本語訳に取り組んで真っ先にこの問題に突き当たりました。この訳業が日中演劇人交流の共通の作業台になることを願っています（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2017）

I.T.I.　第128号
2017年８月31日発行
発　行　公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人　永井多恵子
編集人　曽田修司　吉岩正晴　菱沼彬晁
住　所　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp